

## 日本における野鳥に係る国際交流に 関するアンケート結果

神谷 要

財)中海水鳥国際交流基金財団, 683-0855 米子市彦名新田665

### はじめに

中海水鳥国際交流基金財団では、去る2002年11月2～3日に、環日本海野鳥フォーラムの一環として、環日本海諸国5ヶ国による野鳥に関する会議を行った。この場において、日本白鳥の会の藤巻会長から日本側の国際交流の活動が、各自治体・各団体によってばらばらであることが指摘された。そこで、全国でどのような野鳥に関する国際交流が行なわれているかを調査することとし、そのためのアンケートを行った。

### 方法

電話による聞き取り調査を中心に、1995年以降に国際交流の実施経験の有無・実施内容・実施相手国・実施の国内外などを尋ねた。対象は、行政・NGOを問わず、関係33団体にお尋ねした。このうち何らかの海外との交流があったとした情報を結果としてまとめた。

### 結果

全33団体から返事をいただき、11団体から国際交流を実施しているとの情報をいただいた。ただし、国際交流をしていないという団体であっても、地元のNGOで活動があるという情報をいただいた場合もあり、このような事例を含めると17団体(北九州市, 日本シギチドリネットワーク, 野鳥の会山口県支部, 雁を保護する会, 雁里親友の会, コウノトリの郷公団, 琵琶湖博物館, 琵琶湖水鳥湿地センター, 日本湿地ネットワーク, 谷津干潟観察センター, 鴨池観察館, 富山県自然保護課, 水の駅ビュー福島潟, 新潟市, 厚岸水鳥観察館, 釧路ウェットランドセンター, クッチャロ湖水鳥観察館)より46例の国際交流の活動をご紹介いただいた。

・調査20例：国際交流の活動の内容をみると、海外での調査が最も多かった。これは、湿地同士のつながりを初めに示さなければ、交流の手がかりにならないため

---

Kaname KAMRYA. Results of questionnaire "International exchanges in ornithological and bird-protection activities between Japan and adjacent countries.

と考えられる。

また、研究者だけの活動であるため、実現しやすいためと考えられる。

・講演会10例：二番目に多かった交流の形式が講演会で、研究者に来日していただいて講演会を開くというものであった。大型ホールでの講演会・シンポジウムを開く形式のものが多く、雁の里親友の会が行なっている小学校で講義をするという形式のものが印象的であった。

・会議8例：実施した団体は国際交流と考えていないことが多いが、担当者間の国際会議を開催したり、会議に参加したりする例が多く見られた。

とくに、米子水鳥公園とおなじガンカモ類のネットワークサイトがある新潟市やクッチャロ湖(北海道浜頓別町)では、6ヶ国以上もの参加国のある国際会議が開催されている。このような場合、国内外からさまざまな関係者を招聘して、団体の活動や調査結果を報告している。

・研修3例：海外の担当者に湿地保全の方法を勉強してもらった交流がいくつか存在した。この場合、海外の担当者に長期間(1ヶ月間以上)滞在していただいている。このようなプログラムは、ラムサール条約に係るJICAの事業の一環としてや自治体の職員交換などの形で実施されているようである。

#### ・市民交流4例

市民が実際に渡航するというタイプのものでは、谷津干潟(千葉県習志野市)の相互ホームステイの活動や、野鳥の会山口県支部の韓国との探鳥交流がみられた。これについては、今回実施した環日本海野鳥フォーラムでも要望があがっていた。

その他：特殊な例としては、富山県の鳥類標識の道具を提供するというタイプのものもあった。

また、谷津干潟の鳥類の情報をメーリングリストで交換するというものがあったが、これはシギ・チドリ類の渡りルートが、オーストラリアやアメリカ・カナダなどインターネットの普及率の高い地域で英語圏であるために可能となっているのであろう。

相手国について：相手国は、ガンカモ類の飛来地ではロシアが半数以上を占めており、シギ・チドリ類の飛来地ではオーストラリア・アメリカなどが多かった。ただし、ロシアの場合、調査による交流が主流であり、市民交流まではなかなか達成できていない。これは言葉の問題が一番大きいと思われる。

また、相手国として中国・韓国は意外と少なく、北朝鮮はほとんど例がなかった。